

# OKAME STYLE

VOL.1



丘女会報  
「OKAME STYLE」  
第1号  
平成30年1月発行  
編集 丘女会広報部

## 思い描いたものに 必ずなれる

舞踊家・ダンサー  
55 回生  
西園美彌 さん

### ダンスを始めたきっかけは？

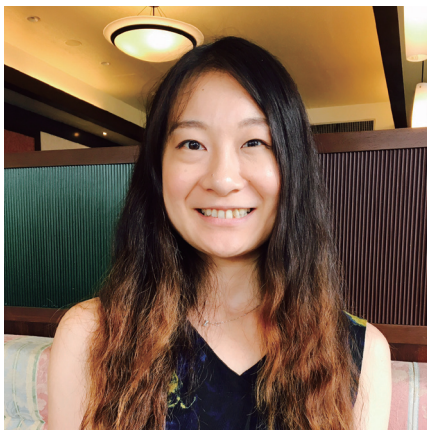
7歳の時、母が通う健康体操クラブについて行ったことがきっかけでした。中学の時は毎日バレエ教室に通って、勉強は宿題も全部学校でやりました。家に帰ったらバレエに一生懸命。両方効率よくこなすための集中力が養われました。集中力、運動神経、頭の回転が良くなったのはバレエのおかげだと思う。世界中の人がバレエをしたらみんな健康になるし、頭もよくなると思って、バレエやダンスの良さを広めていきたいと思っていました。

### 高校に入ってから？

バレエとは少し距離を置いていました。受験の間に太ってしまって、鏡が見られなくなって…。自分の取柄がなくなってしまったように感じたんですね。高校では文化祭実行委員長やダンス委員をやりました。バレエは自分との闘いだったけれど、やっと人とのやり取りの中で、もまれる経験ができたかな。

### 進路はどう決めました？

興味があったのが人間の体の使い方。



#### < Profile >

高 55 回生  
筑波大学大学院体育研究科卒業

2003～07年 同大学およびダンス部  
2007～09年 同大学院スポーツバイオメカニクス研究室にてダンスにおける動作分析の研究

2015年 ドイツ留学

2016年 福田勲追悼特別公演にて、辻本知彦振付による初音ミク（モーションキャプチャーダンサー）を担当

上手い人と下手な人は何が違うのか？医学部に行ける成績ではなくて、そうしたら母が、「スポーツ医学」というジャンルを教えてくれた。先生に聞いたら「じゃあ、筑波大だ」と。それが高3の夏です。

なりたいものはなかったけれど、自分で可能性をつぶしちゃいけないから、とにかく勉強はしていました。だから、そんな時期に進路を決めても何とかなりました。

### 大学生活は？

ダンス部に入ってバレエとは全く違う、コンテンポラリーダンスの世界に飛び込んだんです。今までの体の使い方では評価されないし、ダンスの良さも分からない。しかも、部の中心になる2年生の時に足を骨折。それで舞台監督とか先生の注意をメモする書記役をやりました。客観的に初めて作品を見て、ダンスを見る視点と面白さが分かりました。トレーナーに体の使い方を教わって、リハビリもトレーニングも本当に楽しくて、復帰したらびっくりするくらい踊れるようになったんです。

**大学院で体の使い方を科学的に研究。  
自分には踊ることが必要だった。  
二度目の骨折も乗り越えて。**

「バイオメカニクス、運動力学」という科学的にスポーツを研究する研究室に入って大学院まで進学。卒業後は体育の先生、研究者、バレエの先生、の3択で迷ってバレエの先生になったけれど、一気に時間ができて目標がなくなってしまった。でも、ある人が「あなた踊れるのにもったいない」と舞台上に引っ張り出してくれたんです。私は踊らないとダメなんだ、私には踊ることが必要でした。

それから色々な作品に出させてもらって、新国立劇場の舞台も経験して、30歳でドイツへ留学。でも、3カ月でダンサーの命である足の脛を骨折。「人生が終わった」と思った。ショックだったけれど、怪我をしたダンサーが復帰して、いい踊りができたら、「私はそういう人たちの希望になれる。これもまたチャンスかな」と思って、表現できる体にし



ようとリセットする機会になりました。

### 初音ミクになるって？

日本に戻ってすぐ、初音ミクのモーションキャプチャーダンサーをやりました。私が初音ミクになり、初音ミクが私になる。人間の感情を初音ミクの動きにのせて、その映像だけで人を感動させる…今までのやり方ではとても足りない、難しい仕事でした。

これからもできる限り現役を続けて、唯一無二の、これぞ西園美彌っていう踊りを踊りたい。

あと、私の経験を世の中に生かしたい。自分で閉じていた可能性は体からのアプローチで引き出すことができる。そのきっかけになるような講座を作っていけたらいいな。私は踊りを通して人や自分と対話して、世界がどんどん広がっていったから。体をほぐしたり、鍛えたりすると、心も変わってくると思うんです。

**自分で可能性を閉じないで。  
こうなりたいたいという思いを持ち続ける**

### 現役の高校生に伝えたいことは？

自分で自分の可能性を閉じないで。思い描いたものに必ずなれる。夢を持つとつぶされたときに辛いから、持たない方がいいんじゃないかって思ってた時期もあったけれど、夢はやはり持つことが大事。信じるというか、こうなりたいたいという思いを持ち続けられれば、なりたいたい自分に絶対なれます。

# 目の前の人を助けたい 銀行員→監査法人→弁護士へ



こころ法律事務所 弁護士

35 回生 村上尚子 さん

## どんな学生時代でしたか？

勉強は、あまり一生懸命やりませんでしたね(笑)。高校では放送部に入って、当時流行っていた洋楽を放送で流したり、ライブに行ったり、放課後に教会で英語を教わったりもしました。国際的な仕事につきたくて、一浪して津田塾大の国際関係学科に。大学でも勉強よりも冬はスキー部で雪山にこもり、夏は東南アジアにバックパック旅行に行ったり、ピースボートに乗ったりしていました。

## 就職活動はどうでした？

国連職員やマスコミ系を希望していましたが、試験対策ができてなくて結局、地元に戻って西日本銀行(現・西日本シティ銀行)に総合職で入りました。男女雇用機会均等法が施行されて2年目で、同期入社のうち、総合職採用の女性は1割くらい。広報部希望だったけれ

ど、配属されたのはシステム部。職場では、総合職なのに、お茶くみ当番が回ってきたり、矛盾を感じながら仕事をして、自分がやりたいことは何かをずっと考えていました。

## 転職を決めたきっかけは？

福岡にいた大学の先輩です。彼女に自分の近況をこぼしていたんじゃないかな。その方についで監査法人を紹介していただき、経営コンサルタントの世界へ移りました。やりがいもあって面白かったけれど、「企業の利益のために精力を使うということを一生涯続けていきたいのだろうか?」「自分がやりたいことはこれだろうか?」と、20代半ばでしたが、悩んでいました。

**自分にもできるかも！  
20代後半で弁護士を志す**

## 弁護士を志した理由は？

銀行時代から外国人労働者支援のボランティア活動を続け、たくさんの方と知り合いました。その中に女性弁護士の方がいたんです。私たちのようなボランティアが役所に行っているいろんなことを交渉してもらちがあかないのに、その弁護士が名刺を一枚出しただけで、話が通る。「法律が使えるってすごい」と思いました。そんなある日、司法試験の合格体験記を書店で立ち読みして、「私にもできるかもしれない」と思って勉強を始めました。当時は法学部卒でなくても、予備校で勉強すれば司法試験に合格できたんです。4年間は仕事をしながら、最後の1年は仕事を辞めて勉強したのかな。

## 迷いはなかったですか？

旧司法試験制度の当時は、5年、10年司法試験勉強を続けている人はたくさ

んいたので、孤独感はありませんでした。もちろん葛藤はありましたよ。30歳の誕生日の時も「永久就職(結婚)の道もあるな」なんて考えたり。でも、頑張り続けていればいつか受かるだろうとも思っていました。

## 司法試験合格後は？

司法修習生として1年半の研修があるんですが、そこで同期生の今の夫と出会いました。結婚を決めたのはいいけれど、彼の出身は沖縄。当時の沖縄には、実働で弁護士活動する女性弁護士がいなくて、女性が必要だといろんな方から言われました。私が沖縄で仕事を始める数か月前から、私に頼みたいと待っている人もいました。離婚問題、DV、セクハラ、性犯罪被害とか、そういう問題を抱えた女性を助ける仕事ができてよかったです。沖縄での弁護士生活は、今年で18年目になりますね。

## 出産・育児と仕事の両立は？

2人子どもがいますが、私は子育ても仕事も同じように大切にしたい。自営業なので、ライフスタイルに合わせて仕事量を調整できる。子どもが小さい時は仕事をセーブして手が離れたらもっと仕事するとか。家庭と仕事で頭も気分も切り換えています。

**今の実力が全てではない。  
不安でも、迷っても前へ進んで**

## 現役の高校生に伝えたいことは？

なんでも吸収できる年齢なので、いろんな所に出向いて、いろんな人に出会って、関心のあることには飛び込んでみる。そうすると、自分の中で引き出しが増えていきます。今はネットでなんでも調べられますが、実際に体験することとネット上の情報は違う。「今の実力はこれだから」とか「自分ができることはここまで」って妥協することも決めてしまわない。不安でも、迷っても自分に興味があることはやってみる。人との縁の中で次の転機というか、チャンスが巡ってくることもありますから。私は今でも、尊敬できる人たちと会うことで刺激をうけ、自分の琴線に触れることを大切にしています。



### < Profile >

高 35 回生

津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業

1988 年 西日本銀行入行

1991 年 監査法人トーマツ入社

1999 年 司法試験合格

2001 年 沖縄弁護士会弁護士登録

コザ法律事務所入所

2005 年 こころ法律事務所設立

## 「紹介してほしい人」を募集します

OKAME STYLE は年2回の発行を予定しています。今後の紙面に取り上げてほしい卒業生をご紹介します。自薦、他薦どちらでも構いません。「こんな素敵な人がいます」「この人の話が聞きたい」。多数のご推薦をお待ちしています。

広報委員長 小川訓名(高36回生)

連絡先: 同窓会事務局

oka.dousoukai@gmail.com



# 日銀初の女性次長を経て — 福岡の女性活躍をリードする

福岡中央銀行総合企画部参与

32 回生 岡野みゆき さん

## どんな高校時代でしたか？

地元は福岡でしたが、父の仕事の関係で、中学の2年～3年は沖縄でした。高校入学当初は友人があまりいなくて、大人しかったね、と言われます。当時は運動部と文化部を掛け持ちする人が多かったけれど、私は文芸部一筋。放課後はすぐに半地下の部室に直行。エッセイとかいろいろ書いたりしていました。

## 部活の先輩、ゼミの教授との 出会いが進路を決める

## 進路を決めたきっかけは？

将来のことを何も考えていなかった2年生の終わり頃、文芸部の先輩の「一橋と慶応に受かって、僕は国立に行くけれど、慶応の政治学科は面白いことが学べるぞ」との話を聞いて、当時県外に進学する女子は少なかったけれど、慶応の政治学科に行こうと決めました。実際、入学したら、学際的で、経済、歴史、心理など他の分野と絡めて自由に学べる政治学にハマりました。興味の赴くまま、他の学部の授業を受けに行ったり、...

## ゼミの先生との出会いも転機？

2年生から「政治理論」ゼミに所属。決め手は先生が若く鋭い助教授で、素敵だったから(笑)。でも若手のこれぞと思う先生に師事することは、意外と大事なのです。卒業後も先生は長く現役ですし、ゼミ仲間もどんどん増え、交流の輪が広がっていきます。

## どうして日銀に？

男女雇用機会均等法施行前で、大卒女子の就職は本当に難しかった。一般企業の人事部に連絡を取ると、「どなたの紹介ですか」とコネがないと面接さえ受けられない時代でした。

日銀に入行したのは、本当にたまたま。ゼミの先生が日銀の若手研修プログラムの講師をしていて、日銀が均等法施行を見据えて腰掛け志向でない大卒女子の採用を積極化しようとしていると聞き、面接を受けることになりました。

## 何万回も辞めたいと思った、

若手の頃は、辞めたくなくなったことも何万回。でも、数字に表れない成果や地道な努力を誰かが必ず見ている。日銀には、働き振りを多面的に、公平公正に評価しようとする伝統があったから30年以上続けられたんだと思います。同期入行の大卒女子の何人かは、途中で辞めずに長く一緒だったので励まし合えたことも大きかった。

## ほかに大きな転機は？

2009年に、那覇支店の次長に任命されました。「次長」は副支店長のような立場。日銀の32支店の中で、女性の管理職は初めてでした。どんな局面でも、人から信頼されるよう心がけることの大切さを実感しました。



仕事以外では、那覇支店勤務時に出会った琉球舞踊(国指定無形文化財)を続けています。「健康のために楽しんで長く続けられる趣味を」と気楽な気持ちで始めたけれど、やるからには、やはり本場で学び続けたいと、時々沖縄に出向き細々と続けています。伝統を守り、伝承していくことに情熱をもって取り組んでいる師匠や舞踊仲間たちから、学ぶことが多く、刺激を受けています。

## 今の職場へ移った理由は？

日銀の総合職は、定年を前に別の会社



### < Profile >

高 32 回生

慶応大学法学部政治学科卒業

1984年 日本銀行入行

2017年 福岡中央銀行入行

に転籍することが通例。地元志向が芽生えてきたところに、福岡中央銀行に縁があった。また、転籍する女性の例がまだ少ないので次のステージでも、男性以上に生き生き仕事をしている姿が、後輩の女子たちの励みになればとの思いにも背中を押されました。

## 新たな職場での仕事は？

当行に入行して半年が過ぎたところですが、新人になった気持ち(笑)で取り組んでいます。本社に勤務していますが、日銀時代に培った現場重視の姿勢で県内40か店以上ある店舗に実際に足を運び現場の実情を把握するところから始めています。手触り感のある仕事で、地域銀行として地元貢献できるよう頑張りたい。

## 今いる場所で地道に頑張る。 「戦友」をたくさんつくって

## 現役の高校生に伝えたいことは？

転職でキャリアアップを実現していく人が増えていますが、でも私は、今いる場所で地道にキャリアを重ねることも大事だと思います。ひとりでは良い仕事はできません。一緒に苦難を乗り越えた「戦友」たちこそ財産。それが有れば、新しい道が開けた時に積極的に踏み出せるし、違う環境でもやっていく力になる。高校時代の仲間たち、これから出会う人たちとの絆。後々お互い離れた場所で頑張ることになっても、その絆が人生の大きな支えになります。

## 人生にも旬がある

翻訳家・作家・詩人

5 回生  
馬場与志子 さん

## どんな高校時代でしたか？

2,3年のときは大学入試に向けて猛烈勉強。基礎ができてなくて、中学校の教科書から全部やり直した。小学校5年生の時に敗戦で外地から戻ってきて、財産もなかった。物はなくなるけれど自分の身についたものはなくなる、学問を身につけないとダメだとわき目も振らず勉強して、九大文学部に進みました。男女共学になって5年目で、筑紫丘高校から女子で九大に行った二人目でした。

## それからの経歴は？

九大では、中国で生まれ育ったのに、中国のことを全然知らないと思って中国文学を専攻。卒業後は二十年近く、高等学校で国語の教師をしました。糸島高校の分校で昼間定時制の女子高校。それから九州女子高校に16年。粕屋農業高校や福岡中央高校、中村女子高校、夫の東京転勤で東京に住んだ時は、埼玉の高校にも勤めました。

大学在学中から交際して、卒業した年に結婚、以来ずっと共働きでした。結婚して3か月で夫の両親と同居。当時は保育所がなくて同居の義母に、子ども3人も見てもらいました。

48歳で 中国語を本格的に  
学びなおしたのが転機になった

夫の転勤で東京に行ってからは仕事から離れて自由な時間。長期の旅みたいな、東京各地を訪ねて回っていました。ある時、図書館に中国からの研修団体客がいたんです。ニーハオ、って声をかけたけど、返事が聞き取れなかった。それで中国語を勉強しようと思って。NHKの中国語講座のテキストの裏の中

国研究所中国語研修学校って名前があって直接訪ねてみたんです。

その時、48歳。大学で中国語はやっていたので2年生に編入できて、1年で卒業。さらに研究科の翻訳のコースに進みました。中国の新聞を教材にして予習なしでその場で翻訳する。先生から翻訳がうまいとほめられて、自分は翻訳が向いているのかもと思ったんです。若い人たちと文化祭で劇をしたり、二度目の青春時代のような感じでしたよ。

## 翻訳から創作活動へ

福岡に帰って最初に2年くらいかけて翻訳したのが『故土(ふるさと)』という中国の現代小説。恋愛あり権力闘争ありで面白い。人民文学賞をとった作品ですが、出版してくれるところがなく、しかたなく自費出版しました。54歳の時でした。56歳で亡くなった夫が存命中でとても喜んでくれました。翻訳をやっているうちに、マレーシア、台湾、中国などのいろいろな国の作家と出会い、作品をいただいて翻訳したのですが、2冊目がピンズさんの『迎春花 — 鉄格子に海風が吹いて』というエッセイ集。それらの作品についての論文を書いて、そのおかげで70歳まで11年間九州産業大学で中国語を教えることができました。

その後は最初に言ったように、翻訳だけでなく小説や詩を書いたり創作活動もはじめ、結局ずっと今まで文学修業の道を歩いてきたことになります。

## 今はどんな活動を？

一つは地域活動で、20年来シニアクラブの役員をしています。もう一つは文学活動。①現代詩を書いて持ち寄り合評し合う「ハテナの会」。②年に3回同人誌『筑紫山脈』を発行している「筑紫山脈の



## &lt; Profile &gt;

高5回生

九州大学文学部中国文学科卒業

1953年より42年間、教職に就く  
(そのうち31年が高校、11年が大学)

1989年 翻訳書『故土』出版

2004年 翻訳書『迎春花』出版

2017年 詩集『ジャンケンポンでかくれんぼ』出版

会』で、エッセイ・小説なども書いています。③児童文学誌『小さい旗』の会、そこに載せていた「日本の伝承遊びを詠んだ詩」が、銀の鈴社の編集長の目に留まって、今年の7月1日に『ジャンケンポンでかくれんぼ』という詩集として出版されました。

チャンスが巡って来た時に  
ためらわないで

## 現役の高校生に伝えたいことは？

いつでもできると思うかもしれないけれど、人生にも旬があるんですね。自分のしたいことが見つかって、そのチャンスが巡って来た時に、ためらわずに実行すれば悔いのない生き方になるのではないのでしょうか？

このたび、広報紙「OKAME STYLE」を創刊いたしました。様々な分野にチャレンジし、活躍している筑紫丘高校の女性卒業生を在校生や同窓生の皆様にご紹介し、情報提供することで、身近に感じていただき、進路や生き方を考える参考にさせていただければと願っています。年2回発行する予定ですが、丘女会は今後とも女性たちのチャレンジを応援していきたいと思ひます。

丘女会会長 原田 ゆみ子

## &lt; 編集後記 &gt;

創刊号は「転機」をテーマに素敵な4人にお話を伺いました。これからさらにたくさんの方をご紹介できると思うとワクワクします。皆さんの素晴らしい考え方に、取材中でありながらも、ただただ話に聞き惚れ、同窓生である事に誇りが持てました。

【制作】丘女会 広報委員長：小川訓名（高36）、委員：太田由美子（高32）、米澤一江（高49）、岡優希（高61）、デザイン：藤田明子（高39）